

中村拓也は、自分がどう見られているかをよく知っていた。

仕事が速く、取引先への受け答えにも隙がない。面倒な案件も笑顔で引き受け、締め切りより早く、相手が期待した以上の形で返す。

後輩が失敗すれば穏やかにフォローし、上司の冗談にはちょうどいい温度で笑う。頼りにされることも、そのために何を求められているかも、わかっているつもりだった。

（誰に対しても感じがよく、頼りになる先輩）

それが社内での拓也だった。その評価に不満はない。

（まあ、実際、俺より仕事ができる奴なんてそういないしな）

口には出さない。顔にも出さない。けれど、同じ営業企画部の人間を、拓也は頭の中で細かく順位づ

けしていた。

その中で、年下の後輩である石井直人の評価は低かった。

頼んだ仕事は正確で、締め切りも守る。共有フォルダの管理を任せても、不備を出したことはない。だが、必要なことしか喋らず、上司に話を振られても短く答えて会話を終える。

部署の飲み会にはめったに顔を出さない。昼休みも一人で、イヤホンをつけたまま隅の席に座っている。

（会社は、人間関係も仕事のうちだろ）

数字を揃えるだけなら誰にでもできる。相手の機嫌を読み、話を通し、場を動かすところまでできてこそ一人前だ。拓也はそう考えていた。

ただし、その評価を相手に悟らせるほど、不器用なつもりはなかった。

「石井、昨日の集計ありがとう。助かったよ」

「はい」

笑顔で声をかければ、直人は平坦な声で返す。それで会話は終わるはずなのに、目が合うと、何も言わずに拓也の顔を見ている。

返事を待っているのか、別のことを考えているのか。その視線が、少し苦手だった。

（こういう陰気な奴とは、必要以上に関わらないのが一番だな）

そう思っていた。

木曜の夕方までは。

午後五時、月末の報告会が終わり、会議室から人が引き上げていく。大きな案件をまとめた拓也の周りには、上司や同僚が集まっていた。

「中村、今日の説明よかったよ。先方も納得してた」
「ありがとうございます。石井が数字を綺麗にまとめてくれたおかげです」

自然な笑顔で後輩の名前を出す。直人は会議室の端でパソコンを閉じながら、軽く頭を下げた。

「石井くんも最近頼もしくなったよね」

「中村さんの指示がわかりやすいので」

上司が満足そうに頷く。拓也も直人へ笑顔を向けたが、後輩はそれ以上何も言わなかった。

（褒められたときくらい、もう少し愛想よくすればいいのに）

胸の内だけで吐き捨て、机の上のスマホを手にする。画面には、朝から確認していなかった通知が残っていた。

『共有フォルダへのアップロードが完了しました
計百八十六件』

「……は？」

会社の共有アプリ。その名前の下に並ぶ件数を、拓也はもう一度見た。

午前九時過ぎ、スマホからバックアップ先を開き、出先で撮った写真を共有フォルダへ送った。選んだのは、資料に使う十数枚だけのはずだった。

（百八十六件って、何だよ）

周囲に笑顔を向けたまま、通知を開く。転送履歴に記録されていたのは、午前九時十四分。対象の欄には、写真のファイル名ではなく、バックアップフォルダの名前があった。

操作を急ぐうちに、選択した写真ではなく、フォルダ全体を転送対象にしてしまったらしい。完了を待たず報告会の準備へ戻り、その後は確認していなかった。

スマホでは仕事用と私用のアルバムを分けていた。だが、転送元のバックアップには、写真も動画も、書き出したメモも一緒に保存してある。アルバムを分けただけで、安心していた。

(送り先は、チーム全員が見られる共有フォルダだ)

履歴に並ぶファイル名を見た瞬間、背中から血の気が引いた。仕事用の写真に混じり、見覚えのある日付が続いている。夜、一人きりの部屋で撮りためてきた動画だった。

(男の身体にある、誰にも知られたくなかった場所。そこを自分の指で触っている記録だ)

服を脱ぐところから始まり、脚を開き、濡れたおまんこを鏡へ向ける。クリトリスを指で転がし、声を漏らし、何度も絶頂する姿まで、隠すところなく映っている。

(嘘だろ。誰かが開く前に、公開を止めれば……)

震える指で共有フォルダを開く。だが、転送履歴から進んだ先には、公開が停止されているという表示しか出なかった。

自分ではまだ何もしていない。誰かが気づき、設定を変えたのか。画面を見直したところで、上部へ短いメッセージが届いた。

『中村さん。フォルダへの誤送信について、確認したいことがあります』

送り主は、石井直人だった。

『人のいる場所では話せないので、旧資料室に来てください』

拓也は顔を上げた。会議室の端にいたはずの直人は、もういない。

スマホを握る手に力を込め、同僚には笑顔で挨拶を返した。どんな顔で会議室を出たか、自分でもよくわからなかった。

旧資料室は、執務フロアのいちばん奥にある。電子化の済んでいない契約書や、保存期限を迎えていない案件資料が並び、用事のある社員しか立ち寄ら

ない。

廊下を歩きながら、拓也は何度もスマホを確認した。追加の連絡はなかった。

（まさか、あいつが見たのか！？）

サムネイルだけか。ファイル名だけか。それとも、中身まで。

公開が止まっても、誰かの端末へ保存されていれば、取り消せない。想像するたびに、喉の奥が乾いた。

曇りガラスの向こうに、人影が一つ見えた。拓也は扉の前で息を整え、普段の表情を作ってから中へ入る。

「……石井。誤送信の件って？」

声は乱れていない。直人は奥の作業机の前に立っていた。蛍光灯の白い光が、無表情な横顔を照らしている。

「扉を閉めてください」

「ここで話す必要ある？ 急ぎなら、その画面を――」

「他の人に聞かれてもいい話ですか？」

拓也は口を閉じた。背後の扉を引くと、かちりとラッチが噛み合った。

「……お前、見たのか」

「見ました」

「どこまで」

「一覧は、最後まで」

「中身も聞いている」

「動画を開きました。……業務資料に混ざっていたので、最初は確認のためでした」

取り繕った声を保つのが、急に難しくなった。机の端へ視線を落とし、拓也は唇を引き結ぶ。

「業務資料じゃないとわかったあとも？」

直人は、すぐには答えなかった。

「……答えろよ」

「……全部、見ました」

「仕事を口実にするな。人の私生活を勝手に覗いていい理由になるか」

「なりません」

あっさり認められ、用意しかけた言葉が詰まった。言い逃れされるとばかり思っていた拓也は、直人の顔を見返す。

直人は机のノートパソコンを、拓也へ向けた。

「共有先の公開は止めました。公開停止までの閲覧履歴にあるのは、俺だけです」

「……個人の端末には？」

「個人の端末には保存していません。誰かに送ったこともありません」

直人は管理画面の別の欄を指した。

「誤送信されたフォルダは、共有アプリの中に残っています。今は俺だけが閲覧できる設定にしています」

画面には、公開範囲と閲覧履歴が表示されていた。拓也は設定の変更時刻と、現在の閲覧権限を順に確かめる。直人の説明と食い違う記録はなかった。

自分の端末にある元データとは別に、誤送信した一式が会社の共有アプリに残っている。連携を切れれば次の転送は防げるが、すでに送った分の権限までは変わらない。

ほかの社員に広がっていないことには安堵した。それでも、管理担当の直人は、今もその一式を開ける。目の前の後輩にだけは、知られたままだ。

仕事以外では相手にする必要もないと思っていた男が、今は自分の顔色を見ている。普段の拓也が何を隠していたのか、知ったうえで。

(何で、よりによってこいつなんだよ……！)

「……忘れろ」

「忘れられませんよ」

直人は笑ってもいない。その平静さが、かえって癪に障った。

一步近づかれ、拓也は顎を上げた。普段は机越しに見ている後輩が、思っていたより背が高い。

「中村さん、俺のこと、嫌いですよね」

「……………今、それ関係あるか？」

「人前では褒めてくれる。でも、仕事の話が済むと、俺とは話さない」

「用が済んだら、仕事に戻るだろ」

「他の人とは、そのあとも話してます」

拓也は黙った。直人の視線が逸れない。

「陰気で、職場に馴染めない奴だと思ってる」

「……思っていないと言えば、信じるのか？」

「いいえ」

「なら聞くなよ……」

吐き捨てると、直人の目がわずかに細くなった。
凶星を突かれたことより、そんな違いまで見られて
いたことが腹立たしかった。

「俺は、中村さんのことをずっと見てました」
「気持ち悪い告白だな……」
「そうでしょうね」
「自覚あるなら、退け」
「仕事中の顔は、いつも綺麗です。誰にでも優しく
て、何を言われても笑ってる」

直人は退かない。拓也が横を抜けようとする、
長い腕が伸び、扉へ続く通路を塞いだ。

「動画の中では、全然違った」
「黙れ！」
「眉を寄せて、口を開けて、泣きそうな顔で声を出
してた」
「黙れって言ってるだろ！ それと、動画のことは
誰にも言うな。共有フォルダに残ってる分も、お前

以外には絶対に見せるな！」

「……わかりました」

「口だけじゃ信用できない。ここで約束しろ」

「では、黙っている代わりに条件があります」

「条件……？」

「動画と同じことを、俺にさせてください」

「は……？ ふざけるな！」

「あなたが絶頂する顔を、目の前で見たい」

拓也が胸ぐらを掴もうとした瞬間、その手首を直人に押さえられた。強く握られているわけではない。それでも、いくら振り払おうとしても動かない。

「離せ！」

直人は目を逸らさなかった。脅しを口に行っているくせに、声も表情も普段とほとんど変わらない。その平静さが、拓也の神経を逆撫でした。

「それを飲めば、秘密にするっていいのか？」

「はい。誤送信されたデータは俺以外に見せません。
あなたのことも、誰にも話さない」

断って管理者へ報告すれば、直人からは離れられる。だが、誤送信したファイルの確認が始まれば、自分から中身を説明しなければならない。

何より、見下していた後輩に条件を突きつけられ、何も言い返せず逃げるのが耐えられなかった。

「……わかった」

拓也が吐き捨てると、直人の指からわずかに力が抜けた。

「いいんですか？」

「勘違いするなよ。動画で見たみたいに、簡単にイ
くと思うなよ……！」

「わかりました。頑張って泣かせます」

直人は手を離すと、資料室の扉へ鍵をかけた。金

属音を聞いた瞬間、拓也は反射的に振り返る。

「おい、待て。ここでするつもりか」

「人のいる場所では話せないと言いましたよね。ここなら、誰も来ません」

「だからって——」

言い返す前に肩を押され、作業机の前にある椅子へ座らされた。外されたネクタイで両手首を背もたれの後ろへまとめられる。

直人が鞆から、折り畳まれた黒い布を取り出した。

「……お前、最初からそのつもりで用意してたのか」

「はい」

黒い布で目元を覆われると、蛍光灯も棚も、直人の姿も見えなくなった。すぐ近くに立つ気配だけが、暗闇の中で鮮明になる。

頬へ指先が触れた。輪郭を確かめるように、こめかみから顎まで、ゆっくり撫で下ろされる。

「顔だけは、本当に好きです」

「だけは、って何だよ？」

「性格は悪いので」

「後輩のくせに——」

顎を掴まれ、言葉ごと唇を塞がれた。押しつけるだけの短いキスではない。

下唇を食まれ、開いた隙間から舌が入ってくる。拒むように噛もうとしても、顎を固定されて逃げられない。

「んっ……！♡」

舌先で上顎をなぞられ、背中が震えた。直人はそれを見逃さず、口の中を執拗に舐める。呼吸を奪うほど深く絡めたあと、拓也が息を継ごうとした瞬間にまた塞いだ。

「んうっ♡ ふっ♡ んんっ♡」

唇の端から、濡れた音が漏れる。

くちゅ♡ちゅっ♡くちゅう♡

「っは……お前、キス、長すぎ……♡」

唇が離れる。息を整える間もなく、今度はシャツのボタンへ指がかかった。一つずつ外されていく小さな感触が、見えないせいでやけに大きく感じる。

「勝手に脱がすな！」

「でも、脱がせないと先に進められませんよ」

淡々と返され、腹が立つ。だが、拓也が言い返すより先に、シャツの前が左右へ開かれた。冷えた空気が肌を撫でる。

直人の指は鎖骨から胸へ下り、まだ何もしていない場所を、わざと避けるように円を描いた。

「……触るなら、触れよ……！」

「ここですか？♡」

乳首のすぐ横を押される。

「っ、違う……！♡」

「じゃあ、どこですか♡」

また乳首を避け、胸の下をゆっくり撫でる。焦れたい。目隠しの下で何をされるかわからない緊張と、触れてほしい場所だけ外される苛立ちが、皮膚の下へ熱を集めていく。

「……乳首。そこ触れって言ってんだよ……！♡」

「命令ではなく、頼んでくれないと……♡」

手が腹へ下りた。欲しかった場所には一度も触れないまま、胸へ集まっていた熱だけを置き去りにされる。

「おい、勝手に終わらせるな！♡」

「まだ、頼まれていませんから♡」

「調子に乗るなよ。お前に頭を下げる理由なんか—

—」

「ありますよ」

言い切ろうとしたところで、腹を撫でていた指まで離れた。直人の気配が一步遠ざかり、暗闇の中に取り残される。

「動画を、誰にも見られたくないんでしょう？」

「……脅してるつもりか」

「最初から、その条件でここにあります。俺が黙っている代わりに、動画と同じことをさせる。中村さんも、そうすると言いました」

「……だからって、何でも言うことを聞くと思うなよ！」

「なら、ここで終わりにします。動画の件も、俺が黙っている理由はなくなりますが」

拓也の喉が詰まった。触れられない焦れとは別の冷たさが、背中を走る。

ここで拒めば済む話ではない。秘密を守らせるた

めに、この条件を飲んだのだ。

「……乳首」

「聞こえませんか♡」

「乳首、触れ……！♡」

「まだ命令ですね。動画の中では、もっと素直に声を出していたのに♡」

「それを、言うな……っ！」

「秘密にしてほしいなら、頼んでください♡」

見下していた後輩に敬語を使うなど、普段なら考えられない。だが、動画を広められる恐怖も、触れられないまま晒されている屈辱も、すでに意地だけでは押し返せなかった。

「……乳首、触って……ください……♡」

言わされた。そう理解した途端、顔へ熱が集まる。直人はすぐには触れず、拓也が敬語を使った事実まで味わうように間を置いた。

「よく聞こえました♡」

ようやく、硬くなっていた先端を指の腹で擦られた。

「っん……！♡」

ほんの一度。それだけで肩が跳ねる。

指先が小さな円を描き、輪郭を丁寧になぞった。
もう片方には触れず、一方だけを何度も撫でる。

こり♡ こりこり♡ くるくる♡

「んっ……♡ あっ！♡ そこ、もっと……っ！♡」

先端を摘まれ、ゆっくり引かれた。ちり、とした刺激が胸から腹の奥へ落ちる。何も触れられていない下半身が、勝手に疼いた。

直人の指が離れる。

「……何でやめるんだよ……！♡」

「今の顔を、見ていたかったので♡」

「目隠ししておいて、よく言う……！♡」

「中村さんは見えなくても、俺には全部見えています♡」

その通りだった。拓也には何も見えない。けれど直人は、目隠しをされ、胸元を開かれ、拘束された拓也を好きなだけ眺められる。

そう意識しただけで、下着の内側がじわりと湿った。

膝へ手を置かれる。ぐっと左右へ押し開かれ、キャスター椅子が小さく軋んだ。

「っ、石井♡ そこはまだ……♡」

太ももの内側へ指が滑り込む。スラックスの上から、付け根ぎりぎりまで撫で上げられた。まだ布越しなのに、身体がそこへ意識を集めてしまう。

ゆっくり下へ戻り、また上がる。

さす♡ すり♡ さすさす♡

「ん……っ♡」

おまんこの中心を手のひらで包まれた。

「ふぁっ！♡」

明らかに湿っている。スラックス越しでもわかるほど、熱が籠もっていた。

「もう、ここだけ熱い……♡」

「実況すんな！♡」

手のひらが、布越しにゆっくり動く。柔らかな場所を押し潰さないよう、外側から形を確かめるような触れ方だった。

「んっ……♡ ふぁっ！♡ だから、そこ……っ！♡」

「ここが、動画に映っていたところですか♡」

「言うな……ぁっ♡」

指先が、布越しにクリトリスの位置を探り当てた。
直接触れていない。

薄い下着も、スラックスも間にある。それなのに、
小さく押されるたび、腰が椅子の上で浮きそうになる。

ぐっ♡ くる♡ ぐりぐり♡

「んあっ♡ あっ♡ そこっ♡ 服の上から、やるな…
…っ♡」

「直接がいいんですか♡」

「ちが……んんっ♡」

「どっちですか♡」

「早く、脱がせろよ……っ♡」

言わされた。そう気づいたときには、ベルトが外
されていた。金具が鳴り、ファスナーが下がる。

腰を持ち上げるよう促され、拓也は一瞬だけ抵抗
した。

「脱がせろと言ったのは中村さんです♡」